

能て以て御座候様を以て先上、御座候御機嫌能て可被遊御坐奉恐悦候、

御省念可被下候、扨御同様無事と乍申國家之大変実不可言候

以て今し捕伏候、小孫也山形候に候事、水府之安危ハ即

為に相抱、幕府之御安危ハ天下之御大事ニも至り候義と深く

一通事ニ候得共、威・義兩公之御遺法ハ既に地に落候儀を

御先代烈公御在世中數年之弊風を改、奢侈を制、質素を示し、

遊惰を禁し、文武を御励精被遊候より種々御世話被為在候得共

革正を厭候族、隱計を以て流言讒説終に天保甲辰之年不慮之

御冤罪ニ而御退隠被遊候得共、讒臣巨悪之跡相顯魁首

（四十二）《水戸騷擾一件情勢報告》

態々以て飛脚致啓上候、先以上様益御機嫌能て可被遊御坐奉恐悦候、

隨而御手前様御無事珍重奉存候 野生儀今日迄ハ先無事

御省念可被下候、扨御同様無事と乍申國家之大変実不可言候

誤合御領掌之事ニハ可有之候得共不堪悲痛申進候、一体此度水戸

表騷擾之儀事實錯亂真偽混雜致、威・義二公建國已來

之御家教も相破れ天下諸侯之模範共可相成三藩之親、

公邊輔佐之家格も相崩れ候而已ならず藩屏之安危ハ即

公邊之御盛衰ニも相抱可申儀と痛心仕事ニ候、就而ハ各方御心得之

為ニも不申上置候而者不相濟候、 水府之安危ハ幕府之御安

危ニ相抱、幕府之御安危ハ天下之御大事ニも至り候義と深く

痛心致候故當今之事情概略申進候、 一体御代々之内ニ弛張不

一通事ニ候得共、威・義兩公之御遺法ハ既に地に落候儀を

御先代烈公御在世中數年之弊風を改、奢侈を制、質素を示し、

遊惰を禁し、文武を御励精被遊候より種々御世話被為在候得共

革正を厭候族、隱計を以て流言讒説終に天保甲辰之年不慮之

御冤罪ニ而御退隠被遊候得共、讒臣巨悪之跡相顯魁首

たる結城虎寿、谷田部雲八郎等、誅刑ニ被處トハ其砌
 黨與之者も数人有之候得共、寛太之御處置を以、其罪を
 正されず御有免ニ相成、只後々迄役方へ御用不被遊候様にとの
 御遺書御遺言も被為有候ニ付、是迄役筋へ御取用無之、即此者
 等を一体ニ奸物と称し自然ニ水戸表之常談と相成土庶之無
 差別申習候所、右之者共沈淪罷在候を憂、共ニ沈淪之族と相
 計一度役職へ出候事を相計、播磨守様之御家来矢部水軒等と
 六七年已前より周旋致、近来ハ水藩其余、公邊御役方等へも
 手を廻し候趣、風説も有之候所、一兩年水戸之居合不宜自然
 黨派之形ニ相成、互ニ相排擯致候を幸と致、其機に乗し市川
 三左衛門・朝比奈弥太郎・佐藤図書等、書生之者召連出府致、人を
 讒慝し君上をも奉誣、夫々役職ニ御登用相成、即當今之
 機變ニ罷成候儀ニ有之、扱奸家と申而土庶之無差別称呼
 被致候儀、人情相恨候儀尤之次第ニ候得共
 烈公御代より御排斥相成候儀を相怨ミ此度ニ至、公邊之御役

【七三頁】

たる結城虎寿・谷田部雲八郎等遂ニ誅刑ニ被處候所、其砌
 黨與之者も数人有之候得共、寛太之御處置を以、其罪を
 正されず御有免ニ相成、只後々迄役方へ御用不被遊候様にとの
 御遺書御遺言も被為有候ニ付、是迄役筋へ御取用無之、即此者
 等を一体ニ奸物と称し自然ニ水戸表之常談と相成土庶之無
 差別申習候所、右之者共沈淪罷在候を憂、共ニ沈淪之族と相
 計一度役職へ出候事を相計、播磨守様之御家来矢部水軒等と
 六七年已前より周旋致、近来ハ水藩其余、公邊御役方等へも
 手を廻し候趣、風説も有之候所、一兩年水戸之居合不宜自然
 黨派之形ニ相成、互ニ相排擯致候を幸と致、其機に乗し市川
 三左衛門・朝比奈弥太郎・佐藤図書等、書生之者召連出府致、人を
 讒慝し君上をも奉誣、夫々役職ニ御登用相成、即當今之
 機變ニ罷成候儀ニ有之、扱奸家と申而土庶之無差別称呼
 被致候儀、人情相恨候儀尤之次第ニ候得共
 烈公御代より御排斥相成候儀を相怨ミ此度ニ至、公邊之御役

方ニ取入、私之怨みを報せんか為に無罪を誣、國乱を醸し、私之
 為に國家之安危存亡難計ニ至候事、實に言ニ不忍事にハ
 無之哉、能々御心得可有之事と存候、扱一兩年人心不居合申儀ハ
 烈公御逝去之節より攘夷鎖港之儀に付、議論兩端ニ相分れ
 一和相成兼候所、去年御上京之節、三有司之偏固にて人撰之
 偏なる所より大ニ不平を生し、終に激派沈派と申稱固相立、此兩派ニ相
 拘り不申、全、水戸家之基本より推及致し、幕府之御補助ニも
 可相成儀を周旋致候を公平家と異稱致候所、恐多くも當今
 朝廷より鎖港之儀御直々、勅命被為在、公邊ニおいても御奉承
 被遊、不日ニ御達にも可相成之所、其義御遷延罷成候ニ付、所謂沈
 激之論甚敷、たとへハ公平家沈家之申所にてハ攘夷鎖港之
 事
 御勅命も被為有候義ニ候得共、於公邊不被仰出候而ハ免而も御成就
 相成間敷、且天下之大事人心之向背ニも拘り候事ニ而、容易
 輕動相成難き事も可有之、鎖港之義も攘夷之御備無之而ハ
 難被仰出御義、又攘夷之事ハ元來一國一城之力ニ及候事にハ
 無之、何程志ハ功なる共、公邊より弥々天下へ命令下り、天下闔

【七四頁】

方ニ取入、私之怨みを報せんか為に無罪を誣、國乱を醸し、私之
 為に國家之安危存亡難計ニ至候事、實に言ニ不忍事にハ
 無之哉、能々御心得可有之事と存候、扱一兩年人心不居合申儀ハ
 烈公御逝去之節より攘夷鎖港之儀に付、議論兩端ニ相分れ
 一和相成兼候所、去年御上京之節、三有司之偏固にて人撰之
 偏なる所より大ニ不平を生し、終に激派沈派と申稱固相立、此兩派ニ相
 拘り不申、全、水戸家之基本より推及致し、幕府之御補助ニも
 可相成儀を周旋致候を公平家と異稱致候所、恐多くも當今
 朝廷より鎖港之儀御直々、勅命被為在、公邊ニおいても御奉承
 被遊、不日ニ御達にも可相成之所、其義御遷延罷成候ニ付、所謂沈
 激之論甚敷、たとへハ公平家沈家之申所にてハ攘夷鎖港之
 事
 御勅命も被為有候義ニ候得共、於公邊不被仰出候而ハ免而も御成就
 相成間敷、且天下之大事人心之向背ニも拘り候事ニ而、容易
 輕動相成難き事も可有之、鎖港之義も攘夷之御備無之而ハ
 難被仰出御義、又攘夷之事ハ元來一國一城之力ニ及候事にハ
 無之、何程志ハ功なる共、公邊より弥々天下へ命令下り、天下闔

國の力を盡候時至公邊之輔翼と威力を尽候事御親
藩職ニ而夫迄相待候而も三藩之辱に非すといひ激家之論
にハ已ニ

朝廷より勅書も有、將軍家にて御直ニ御奉承被遊候程之儀、其
俣御差置被遊候而ハ被對 朝廷當今人心之向背、尚更
後世如何御称可申上候哉、たとへ 公邊において無御據御情實被為在
候共御用捨ハ格別三藩之御職掌に於て一度利害御申上ニ不
相成候而者御忠誠とハ難申、兎も角も 君上より御建言あるへき
こそ御職掌に相叶可申、臣として此義上言せざるハ不忠なる
へしとの儀にて、其道に格別懸隔ハ無之候得共、追々居合不宜
候所、其已前何方之浪人ニ候哉せめて斬弟にても致し
國に報し可申とか申事にて田丸稻右衛門と相談之上在所之内にて
志ある者を召連れ罷出候由之所、終ニ野州大平山に屯し
人数衆多ニ相成、つまり金穀等之暴取ニ至り民苦をなし
就中田中源藏なる者此類なき暴戾にて既に大平山に殺
さるへかりしを辛ふして逃出野州邊所々に於て博徒

【七五頁】

國之力を盡候時至公邊之輔翼と威力を尽候事御親
藩職ニ而夫迄相待候而も三藩之辱に非すといひ激家之論
にハ已ニ

朝廷より勅書も有、將軍家にて御直ニ御奉承被遊候程之儀、其
俣御差置被遊候而ハ被對 朝廷當今人心之向背、尚更
後世如何御称可申上候哉、たとへ 公邊において無御據御情實被為在
候共御用捨ハ格別三藩之御職掌に於て一度利害御申上ニ不
相成候而者御忠誠とハ難申、兎も角も 君上より御建言あるへき
こそ御職掌に相叶可申、臣として此義上言せざるハ不忠なる
へしとの儀にて、其道に格別懸隔ハ無之候得共、追々居合不宜
候所、其已前何方之浪人ニ候哉せめて斬弟にても致し
國に報し可申とか申事にて田丸稻右衛門と相談之上在所之内にて
志ある者を召連れ罷出候由之所、終ニ野州大平山に屯し
人数衆多ニ相成、つまり金穀等之暴取ニ至り民苦をなし
就中田中源藏なる者此類なき暴戾にて既に大平山に殺
さるへかりしを辛ふして逃出野州邊所々に於て博徒

を召集し暴行を恣にする候者之外に國分組と申其徒六七十
 人もありしは是より追ひ給へば一暴行も沈論激論を稱し
 居り者といふ次第も遠くものや生れ候つたの玉造村と申
 にも召集し居り候中二三四男ありし者七八輩ありしと
 十人斬弟を唱居候もの追々論候上、家中子弟皆自訴
 ありし者二一昨者にお返し内脱走し候者五人ありし者
 召捕として國中探索致候所、夫々自殺、召捕等二相成、其節之屯
 集ハ消亡ニ相成候、然るに其頃議論起り一昨年斬弟を唱、玉造
 屯集之者を無下に所置せしハ、暴也とて有司之内其説に泥む
 者有之、其時探索、召捕等出向候者ハ足輕、同心之輩ニ至迄、又々在々
 村役人按内致候者迄貶斥致候二付、彼者共ハ有司之僻を自然相怨
 候様相成候折柄、即數年来屏居之奸物等如此暴徒之振廻
 をも一向ニ不構、下々之難儀を不可言、殊罪なき者を退け私之
 主意を上言して下々之難儀を救可申、幸ニ御取用ニ相成候上ハ
 速ニ歸國之上隱居を願可申杯と彼貶斥せられし者并奸家之
 者を引ひ名ハ公議に託し、實ハ數年来之私憤を報せん事を

【七六頁】

を集め暴行を恣に致候趣、右之外に國分組と申其徒六七十
 人も有之候哉、是又源藏に續し暴行二而、沈論、激論と稱し
 居候者とハ又次第も違候ものニ御坐候、扱一昨年玉造村と申
 所に集り居御家中之二三男、少年之子弟七八輩、郷在之者二三
 十人斬弟を唱居候もの追々論候上、家中之子弟皆自訴
 に及、夫々之所置ニ相成候所、右之内脱走之者五六人有之に付
 召捕として國中探索致候所、夫々自殺、召捕等ニ相成、其節之屯
 集ハ消亡ニ相成候、然るに其頃議論起り一昨年斬弟を唱、玉造
 屯集之者を無下に所置せしハ、暴也とて有司之内其説に泥む
 者有之、其時探索、召捕等出向候者ハ足輕、同心之輩ニ至迄、又々在々
 村役人按内致候者迄貶斥致候二付、彼者共ハ有司之僻を自然相怨
 候様相成候折柄、即數年来屏居之奸物等如此暴徒之振廻
 をも一向ニ不構、下々之難儀を不可言、殊罪なき者を退け私之
 主意を上言して下々之難儀を救可申、幸ニ御取用ニ相成候上ハ
 速ニ歸國之上隱居を願可申杯と彼貶斥せられし者并奸家之
 者を引ひ名ハ公議に託し、實ハ數年来之私憤を報せん事を

巧と兼而夫々手を入置候事故、夫部水軒等他人之容易ニ

通行不相成御閑所等障りなく通行相済、出府周旋致候由入邸之上直々三人共

執政ニ被命、間もなく、結城虎寿之餘黨、内藤儀左衛門・友部

八太郎ら推挙、樞機之職ニ入可申と計候所、夫八中山殿之建議ニ而

用ひられざるよし、併し追々、先公にて御退被遊候菊地善

左衛門等を始奸人共悪路に進め、正義之士を退け候故、國中

一同ニ議論起、先公之兼而御遺書・御遺言迄も被遊候奸家を

執政ニ御登用ありてハ御孝道とハ難申、又、烈公様之御遺志

御継述被遊候様にと

天朝・公辺よりも度々被、仰出候御旨意ニ違、是又御不忠に

陥り候様にて、御不徳を伝候事ニ候間、烈公様御遺志御

継述、公邊思召も御遵奉、御忠孝之大節御貫き被遊候様にと

士民共出府ニ相成、御國中頗動揺致候二付、早速出張、鎮撫可

致との達ニ相成、番頭・御目付其外頭々夫々申論候得共相纏り兼

終ニ小金宿迄押出候様相成候所、公邊ニ被為置候而も奸人之

為に水府之騒動ニ而ハ不宜と御洞察被遊、御沙汰之趣を以

【七七頁】

巧と兼而夫々手を入置候事故、夫部水軒等他人之容易ニ
通行不相成御閑所等障りなく通行相済、出府周旋致候由入邸之上直々三人共
執政ニ被命、間もなく、結城虎寿之餘黨、内藤儀左衛門・友部
八太郎ら推挙、樞機之職ニ入可申と計候所、夫八中山殿之建議ニ而
用ひられざるよし、併し追々、先公にて御退被遊候菊地善
左衛門等を始奸人共悪路に進め、正義之士を退け候故、國中
一同ニ議論起、先公之兼而御遺書・御遺言迄も被遊候奸家を
執政ニ御登用ありてハ御孝道とハ難申、又、烈公様之御遺志
御継述被遊候様にと
天朝・公辺よりも度々被、仰出候御旨意ニ違、是又御不忠に
陥り候様にて、御不徳を伝候事ニ候間、烈公様御遺志御
継述、公邊思召も御遵奉、御忠孝之大節御貫き被遊候様にと
士民共出府ニ相成、御國中頗動揺致候二付、早速出張、鎮撫可
致との達ニ相成、番頭・御目付其外頭々夫々申論候得共相纏り兼
終ニ小金宿迄押出候様相成候所、公邊ニ被為置候而も奸人之
為に水府之騒動ニ而ハ不宜と御洞察被遊、御沙汰之趣を以

朝比奈弥太郎は、佐藤國吉の命を乞ふに、初付添罷登奸諸
 生召連罷下候所、筑波屯集之者國を捨候とハ乍申國に奸家
 之蜂起候を相歎候哉、途中ニ於て可打之風説有之歟にて
 筑波へ討手ニ向居候市川三左衛門と合し共々國元へ下候途中筑波
 之上ニハ前文歎願ニ出候者并鎮撫方へ被仰付罷出居候父兄
 等或ハ召捕斬罪等不容易事ニ相成行候ニ付、御國許へ取鎮として
 大炊頭様 公邊へも伺済之上、御目代として江戸表御出立御執政
 三人御番頭等を初小金宿滞留之士庶都而御召連御下ニ相成、
 然る所去月廿三、四日方ニも候哉、筑波之徒市川・佐藤・朝比奈共を
 討滅候義残念ニ存候故と相見候、御城下へ押寄候所兼々用心致
 口迄御着候所、
其以前御領分小幡宿より向無を戻し、一向雜立不甲義ハ兼而御城下より遠
 之儀等し利害申聞承服致候得共道中筋並木共切倒、往來を妨置候所行至櫛御立腹ニ御
 坐候得共、兎も角も難無之命にて御下被成候事故萬事御勘弁にて御通行ニ相成候事
 城下より若年寄天野伊内、御目付大井幹三郎、御使番渡邊伊左衛門、
 十人目付組頭鈴木八左衛門等罷越候ニ付、
何れも小具足陣羽織着軍陣の支度にて罷出候次第
 甚如何敷大炊頭様にも御立腹被成候趣尤之次第也

【七八頁】

朝比奈弥太郎・佐藤國書御役御免慎被仰付候、初付添罷登奸諸
 生召連罷下候所、筑波屯集之者國を捨候とハ乍申國に奸家
 之蜂起候を相歎候哉、途中ニ於て可打之風説有之歟にて
 筑波へ討手ニ向居候市川三左衛門と合し共々國元へ下候途中筑波
 之上ニハ前文歎願ニ出候者并鎮撫方へ被仰付罷出居候父兄
 等或ハ召捕斬罪等不容易事ニ相成行候ニ付、御國許へ取鎮として
 大炊頭様 公邊へも伺済之上、御目代として江戸表御出立御執政
 三人御番頭等を初小金宿滞留之士庶都而御召連御下ニ相成、
 然る所去月廿三、四日方ニも候哉、筑波之徒市川・佐藤・朝比奈共を
 討滅候義残念ニ存候故と相見候、御城下へ押寄候所兼々用心致
 口迄御着候所、
其以前御領分小幡宿より向無を戻し、一向雜立不甲義ハ兼而御城下より遠
 之儀等し利害申聞承服致候得共道中筋並木共切倒、往來を妨置候所行至櫛御立腹ニ御
 坐候得共、兎も角も難無之命にて御下被成候事故萬事御勘弁にて御通行ニ相成候事
 城下より若年寄天野伊内、御目付大井幹三郎、御使番渡邊伊左衛門、
 十人目付組頭鈴木八左衛門等罷越候ニ付、
何れも小具足陣羽織着軍陣の支度にて罷出候次第
 甚如何敷大炊頭様にも御立腹被成候趣尤之次第也

物何し... 道中時... 諸生共何之為ニ差出置候哉御尋ニ
 相成早々御入城可被成段御申聞にて中路迄御出ニ相成候所、市川
 三左衛門手方御行烈へ向ひ大炮打懸候ニ付、大炊頭様殊之外
 御立腹被成 仮初ニも中納言殿目代にて罷下候義を相弁ながら
 發炮致候杯有間敷致かたニ付早速取鎮候様にと之事ニ而
 終戦争と相成候儀ニ有之、然る所市川三左衛門初奸人共より
 此度出府致居候執政・番頭以下之者共ハ鎖港主張にて
 筑波屯集之徒同意之内存申触し公邊御役方へ取入御
 人数を以打取可申と相巧追々
 君上へも内訴相成候趣にて道路之説も紛々ニ御坐候所大炊頭
 さま御人数 執政・番頭方在々之者迄三千人程之人数にて
 有之、然るを以筑波屯集之浮浪同意之者之趣ニ申触候故
 彼暴徒同様ニ見通され候義甚以残念至極ニ付是非奸家
 を討、恨を散せんとの事にて一同必死を極候趣、然るに
 公邊よりハ追々御大兵御差出ニ相成御城へ御繰込ニ相成愈奸物
 之讒言に陥り候義に付、皆々涕泣必死を極候様子ニ有之
 大炊頭様ニ随ひ帰國之輩ハ多分沈と称し公平と唱候者

【七九頁】

如何之次第にて道中時、諸生共何之為ニ差出置候哉御尋ニ
 相成早々御入城可被成段御申聞にて中路迄御出ニ相成候所、市川
 三左衛門手方御行烈へ向ひ大炮打懸候ニ付、大炊頭様殊之外
 御立腹被成 仮初ニも中納言殿目代にて罷下候義を相弁ながら
 發炮致候杯有間敷致かたニ付早速取鎮候様にと之事ニ而
 終戦争と相成候儀ニ有之、然る所市川三左衛門初奸人共より
 此度出府致居候執政・番頭以下之者共ハ鎖港主張にて
 筑波屯集之徒同意之内存申触し公邊御役方へ取入御
 人数を以打取可申と相巧追々
 君上へも内訴相成候趣にて道路之説も紛々ニ御坐候所大炊頭
 さま御人数 執政・番頭方在々之者迄三千人程之人数にて
 有之、然るを以筑波屯集之浮浪同意之者之趣ニ申触候故
 彼暴徒同様ニ見通され候義甚以残念至極ニ付是非奸家
 を討、恨を散せんとの事にて一同必死を極候趣、然るに
 公邊よりハ追々御大兵御差出ニ相成御城へ御繰込ニ相成愈奸物
 之讒言に陥り候義に付、皆々涕泣必死を極候様子ニ有之
 大炊頭様ニ随ひ帰國之輩ハ多分沈と称し公平と唱候者

此にてありて、強港論、其強く者、斗ふに違し、今日、奸人、豈、用、之、
列、之、捕、之、也、進、退、者、は、後、由、を、時、に、移、し、之、能、成、功、者、は、右、有、
之、の、大、海、國、を、成、る、は、奸、人、共、一、身、全、を、得、か、た、く、存、込、且、大、炊、頭、
に、ハ、御、國、政、御、任、せ、ま、し、御、下、向、と、承、り、弥、以、御、入、城、相、成、候、而、者、一、身、
大、事、無、此、上、儀、と、存、込、候、故、似、せ、御、目、代、之、趣、二、立、て、申、触、し、農、民、
共、迄、驅、集、め、追、而、者、筑、波、暴、徒、同、意、杯、と、君、上、并、公、邊、へ、も、奉、
誣、候、事、二、有、之、あ、ま、つ、さ、へ、大、炊、頭、様、へ、大、砲、打、掛、候、義、を、大、炊、頭、様、
方、より、先、發、致、候、杯、と、流、言、致、し、尚、又、君、上、へ、も、右、之、振、二、委、細、
讒、訴、申、上、候、由、候、得、共、大、炊、頭、様、最、初、より、戰、争、之、思、召、二、無、之、義、者、
一、向、砲、器、之、御、心、構、も、無、之、御、城、入、口、迄、も、被、為、入、候、筈、ハ、有、之、間、敷、
次、第、二、候、間、奸、人、共、一、身、之、難、を、逃、ん、か、為、に、右、様、之、儀、を、
公、邊、之、御、役、方、并、君、上、へ、迄、も、申、上、候、哉、追、々、公、邊、之、御、人、數、御、
繰、込、相、成、候、而、已、なら、す、罪、な、き、三、千、人、程、之、者、を、筑、波、暴、徒、同、意、
之、惡、名、二、陷、れ、候、と、ハ、実、二、痛、歎、此、事、二、候、扱、暴、徒、と、申、ハ、前、にも、認、
候、通、田、中、源、藏、其、余、國、分、組、杯、にて、此、徒、を、是、迄、見、通、し、置、候、ハ、
二、三、有、司、之、怠、慢、にて、畢、竟、人、心、之、居、合、方、を、余、り、慮、り、過、
り、被、成、候、由、も、お、あ、る、と、思、候、は、御、心、對、し、不、相、濟、義、二、候、得、共、讒、構、

【八〇頁】

共にて曾て鎖港論主張之者計にハ無之、全奸人登用無之
烈公様之御遺志御継述被遊候様ニと歎願致候者二而、右之
もの共帰國相成候而ハ奸人共一身全を得かたたく存込、且大炊頭様
にハ御國政御任せにて御下向と承り、弥以御入城相成候而者一身之
大事無此上儀と存込候故、似せ御目代之趣ニ立て申触し農民
共迄驅集め追而者筑波暴徒同意杯と君上并公邊へも奉
誣候事二有之、あまつさへ大炊頭様へ大砲打掛候義を大炊頭様
方より先發致候杯と流言致し尚又君上へも右之振二委細
讒訴申上候由候得共、大炊頭様最初より戦争之思召ニ無之義者
一向砲器之御心構も無之、御城入口迄も被為入候筈ハ有之間敷
次第二候間、奸人共一身之難を逃んか為に右様之儀を
公邊之御役方并君上へ迄も申上候哉追々公邊之御人數御
繰込相成候而已ならず罪なき三千人程之者を筑波暴徒同意
之惡名ニ陥れ候とハ実ニ痛歎此事二候、扱暴徒と申ハ前にも認
候通、田中源藏其餘國分組杯にて此徒を是迄見通し置候ハ
二三有司之怠慢にて畢竟人心之居合方を余り慮り過
候故、終二手出相成兼候段、其職に對し不相濟義二候得共、讒構

少儀ミツツに無罪之者迄一圓ニ右暴徒と名を等ふし一して
怨罪ニ沈め候義、奸邪之所為不得止様ニも相成候而者 上之
御明徳を暗し奉り候義ハ申迄も無之、第一 公邊御徳澤之
御障とも可罷成哉、実ニ奉恐入候次第ニ御坐候、且又先達より之
戰爭之義者、只今と相成候而者、所謂兵結て不解と申形ニ罷成、
一方ハ是非共 公邊之御手を奉借候而も不打勝候而ハ一身を
免るへき道なく、又一方ハ奸邪之術中に陥り 公邊・君上
までも讒匿を構、暴悪之虚名を負せられ候義故、死して
恨を奸に報し止へしとの形勢にて、双方共手を収かたき場合
に至り、何れへ勝負相付候共、無益ニ数千之人命を損不申候而ハ
不相成、其上ニも連及連坐非命に陥り、父兄・妻子之難義ニ及候儀
唯今より想像致候事ニ有之、夫共罪狀顯然たる者ニも候ハ、
幾万之形ニ被行候共申分も無之御坐候所、僅奸人三四輩之為ニ
数千之人命を損し、災國家ニ及候義、実ニ
公邊御仁恤之御徳化ニ相拘り、後日真偽分明之時、如何御評可申
上候哉、水戸家之御安危而已ニハ無之儀故 公邊ニ被為置候而も

【八一頁】

御泥ミ公正無罪之者迄一圓ニ右暴徒と名を等ふして
怨罪ニ沈め候義、奸邪之所為不得止様ニも相成候而者 上之
御明徳を暗し奉り候義ハ申迄も無之、第一 公邊御徳澤之
御障とも可罷成哉、実ニ奉恐入候次第ニ御坐候、且又先達より之
戰爭之義者、只今と相成候而者、所謂兵結て不解と申形ニ罷成、
一方ハ是非共 公邊之御手を奉借候而も不打勝候而ハ一身を
免るへき道なく、又一方ハ奸邪之術中に陥り 公邊・君上
までも讒匿を構、暴悪之虚名を負せられ候義故、死して
恨を奸に報し止へしとの形勢にて、双方共手を収かたき場合
に至り、何れへ勝負相付候共、無益ニ数千之人命を損不申候而ハ
不相成、其上ニも連及連坐非命に陥り、父兄・妻子之難義ニ及候儀
唯今より想像致候事ニ有之、夫共罪狀顯然たる者ニも候ハ、
幾万之形ニ被行候共申分も無之御坐候所、僅奸人三四輩之為ニ
数千之人命を損し、災國家ニ及候義、実ニ
公邊御仁恤之御徳化ニ相拘り、後日真偽分明之時、如何御評可申
上候哉、水戸家之御安危而已ニハ無之儀故 公邊ニ被為置候而も

深く御堅慮不被為在候而ハ、真ニ天下之御大事ニも及可申哉と
唯々涕泣而已ニ御坐候、且申上候ハ恐多事ニハ候得共、御三藩ニ
如此騷擾出来候義、水戸家之御恥辱已而ニハ無之、天下之
笑物ニ相成候義、何共只惜き次第ニ而 公邊御所置之當否ハ
天下人心之向輩國家之治亂ニも相抱候義ニ付萬分之
一も天下之御採用ニも可相成歟と存候故口惜き余リニ恐多き
事共荒増相認申候、宜御推考可被下候、右ハ全三四之奸人
身を免る之謀計より出て、國家之大事ニ及候、當今之戰爭
紛雜之間にてハ筑波暴徒合躰之実否も相分兼可申哉候得共
後日ハ必正儀分明ニ可有之候、唯々 公邊之御人数ハ打向候節ニハ
幕敵ニ可相成と是而已苦心之至御坐候、若又是等之事情
公邊へ御分ニ相成御人数■纏■所へ御引セニも罷成候ハ、必定奸家
之心氣少しく相摧け、且又御目代方にてても必死之覚悟相極
候者共之心も弛候ハ、双方互ニ闘心相消し、戰爭も相止
可申義と奉存候、其上にて 公邊より沈・激ニ不抱大身両三人
も御呼出ニ而御尋被遊候ハ、正邪・忠奸・沈激之情態も委細

【八二頁】

深く御堅慮不被為在候而ハ、真ニ天下之御大事ニも及可申哉と
唯々涕泣而已ニ御坐候、且申上候ハ恐多事ニハ候得共、御三藩ニ
如此騷擾出来候義、水戸家之御恥辱已而ニハ無之、天下之
笑物ニ相成候義、何共只惜き次第ニ而 公邊御所置之當否ハ
天下人心之向輩國家之治亂ニも相抱候義ニ付萬分之
一も天下之御採用ニも可相成歟と存候故口惜き余リニ恐多き
事共荒増相認申候、宜御推考可被下候、右ハ全三四之奸人
身を免る之謀計より出て、國家之大事ニ及候、當今之戰爭
紛雜之間にてハ筑波暴徒合躰之実否も相分兼可申哉候得共
後日ハ必正儀分明ニ可有之候、唯々 公邊之御人数ハ打向候節ニハ
幕敵ニ可相成と是而已苦心之至御坐候、若又是等之事情
公邊へ御分ニ相成御人数■纏■所へ御引セニも罷成候ハ、必定奸家
之心氣少しく相摧け、且又御目代方にてても必死之覚悟相極
候者共之心も弛候ハ、双方互ニ闘心相消し、戰爭も相止
可申義と奉存候、其上にて 公邊より沈・激ニ不抱大身両三人
も御呼出ニ而御尋被遊候ハ、正邪・忠奸・沈激之情態も委細

先代之遺訓に隨ひ、國家を御守り此上御家中一和致し
公邊之御輔翼とも相成候ハ、公邊御威徳之寛大なる
は奉申二不及、國家之御為公私之幸此上も有ましき
御儀と奉存候、左候へハ筑波之暴徒も随分御家御一手
にて御征伐御行届二相成、あへて公邊御大兵を奉勞迄も
有之間敷義と奉存候、實に御家御存亡之時日二候間身命
にかけ、幾重にも御尽力相祈申候、何れも事柄多端二而混
乱那致候間、能々御勘弁二而御周旋之義御尤二御坐候、臨書
涕泣悲歎ニ不堪、尚追々可得貴諭候、以上

八月

尚々御國戰爭一先相止候而、奸人之陰謀顕然たる上
公邊方嚴命を以夫々御所置も御坐候ハ、愈國家安靜ニ至候
儀と奉存候、萬一夫二而も治り方不宜候ハ、役義不行届之もの
嚴重御沙汰を以御所置相成候共、必十数人之上二ハ出申間敷、実々
是形ニ戰爭にて勝負相決候へハ数千無罪之人命を絶候而已

【八三頁】

御聞取之上にて調和之義御世話被為在候ハ、自然御
先代之遺訓に隨ひ、國家を御守り此上御家中一和致し
公邊之御輔翼とも相成候ハ、公邊御威徳之寛大なる
は奉申二不及、國家之御為公私之幸此上も有ましき
御儀と奉存候、左候へハ筑波之暴徒も随分御家御一手
にて御征伐御行届二相成、あへて公邊御大兵を奉勞迄も
有之間敷義と奉存候、實に御家御存亡之時日二候間身命
にかけ、幾重にも御尽力相祈申候、何れも事柄多端二而混
乱那致候間、能々御勘弁二而御周旋之義御尤二御坐候、臨書
涕泣悲歎ニ不堪、尚追々可得貴諭候、以上

八月

尚々御國戰爭一先相止候而、奸人之陰謀顕然たる上
公邊方嚴命を以夫々御所置も御坐候ハ、愈國家安靜ニ至候
儀と奉存候、萬一夫二而も治り方不宜候ハ、役義不行届之もの
嚴重御沙汰を以御所置相成候共、必十数人之上二ハ出申間敷、実々
是形ニ戰爭にて勝負相決候へハ数千無罪之人命を絶候而已

公事申渡すに天口より大なる誠意を何れ申上り候事し
自然御威徳之御衰微相成可申、甚以痛歎ニ不堪候、何ニ致
せ、只今之分にてハ、一旦奸に徒ひ候者逆も逃れぬ場合と
覚悟致し、ひたすら死之一方ニ片向居候間、前後之義ニも
暗く相成中々以理解も届兼候儀と相見得申候、何れも御一大
事之事故無御油断御尽力之程奉願候、以上

安部撰津守様御陣屋堅上州上州岡部詰より申越候由
御御家中太平逸八持参写之、元治元年十一月廿日

當十三日北隣御旗本領所より内通有之、近き内ニ浪人共利根川
渡船可致候様申越候二つき、兼而下手斗村と申へ出張致居候もの共、猶
又
平塚村近く押出候所、双方物見騎馬出會両度トモ申候、然るに
賊徒より申出候ニハ武田仰運齋水戸館江之通行致候、安部撰津守殿
領分相通候、三百余人内手負人四人、戸板に載せ候者式人、馬四拾疋
程御通給度候様にと申出候由、物見之即答ニ相通し候義相成
不申候と申切候所、左候ハ、重役衆へ御直談可申と申出候よし、

【八四頁】

ならず、終にハ天下之御一大事ニ及、誠無益共、何共可申様無之、
自然御威徳之御衰微相成可申、甚以痛歎ニ不堪候、何ニ致
せ、只今之分にてハ、一旦奸に徒ひ候者逆も逃れぬ場合と
覚悟致し、ひたすら死之一方ニ片向居候間、前後之義ニも
暗く相成中々以理解も届兼候儀と相見得申候、何れも御一大
事之事故無御油断御尽力之程奉願候、以上

(四十三)安部撰津守様御陣屋堅上州上州岡部詰より申越候由

安部撰津守様御陣屋堅上州^①岡部詰より申越候由、同人
様御家中太平逸八持参写之、元治元年十一月廿日

當十三日、北隣御旗本領所より内通有之、近き内ニ浪人共利根川
渡船可致候様申越候二つき、兼而下手斗村と申へ出張致居候もの共、猶
又
平塚村近く押出候所、双方物見騎馬出會両度トモ申候、然るに
賊徒より申出候ニハ武田仰運齋水戸館江之通行致候、安部撰津守殿
領分相通候、三百余人内手負人四人、戸板に載せ候者式人、馬四拾疋
程御通給度候様にと申出候由、物見之即答ニ相通し候義相成
不申候と申切候所、左候ハ、重役衆へ御直談可申と申出候よし、

物見しと申候者重役へ直談有之候共、公儀より之御達も有之、旁相通し不申と断候由、掛合両度二及候よし、其後申出候者然者他領相通候ハ、不苦候哉と申出候二付此方より他領と申義者此方より答二及兼候と申候所、左候ハ、一戦之上通り可申候戸申候より事終り、十四日夕七ツ時頃手配致候内賊徒押通候故、矢庭二大小之砲發致、太鼓を鳴らし打而出候所、賊徒右往左往ニ散亂致候と申事二候

首二内卷

中山三藏取
秋山久兵衛

生捕老人

最初組付候者ハ 伊原某と申者之由

鞍置馬式疋

小荷駄馬式疋 具足式領

其外品々三拾七品と申候分取致候由、右在所方飛脚相越候二付今朝御届相成候

右賊徒之内女武者一人有之、緋装束にて長刀を能遣八ひ戦士三人を相手ニ致美事二切抜逃去りと申候由

【八五頁】

物見之者申候者重役へ直談有之候共、公儀より之御達も有之、旁相通し不申と断候由、掛合両度二及候よし、其後申出候者然者他領相通候ハ、不苦候哉と申出候二付此方より他領と申義者此方より答二及兼候と申候所、左候ハ、一戦之上通り可申候戸申候より事終り、十四日夕七ツ時頃手配致候内賊徒押通候故、矢庭二大小之砲發致、太鼓を鳴らし打而出候所、賊徒右往左往ニ散亂致候と申事二候

首二内卷
中山三藏取
秋山久兵衛

生捕老人
最初組付候者ハ 伊原某と申者之由

鞍置馬式疋 小荷駄馬式疋 具足式領

其外品々三拾七品と申候分取致候由、右在所方飛脚相越候二付今朝御届相成候

右賊徒之内女武者一人有之、緋装束にて長刀を能遣八ひ戦士三人を相手ニ致美事二切抜逃去りと申候由

傳三郎より聞書覚

八月二日浦湊領事館前沖合へ異船四艘懸候事

但此所長州府中領壇ノ浦前田と申所之墓場に向ひ陸より
船迄式拾丁程隔

一 同日八ツ時頃迄段々大小之船々々拾四艘右沖へ掛る

大船 八九十間より百間余 船の片表へ大砲式十四挺懸掛
皮の幕を張置候事大砲之玉も利不申と云

小船 三十五間より四十間先
迄大砲片表六十丁宛同前

一同四日朝長州より役人兩人か小船二而異國船へ乗込、何ぞ應

接被致候右役人を留置無程兩墓場を目當ニ炮發致
候より双方打合と成、夜に入て止む

右者大船壹艘沖中へ横たハリ片表の大砲順々に打發し

終り候へハ小船式艘六挺懸大砲を打立候内大船相廻り前之
如く終ハ小船又々右之通打廻し片時も絶間なく

【八六頁】

(四十四) 伝三郎より聞書覚《下関砲撃事件》

傳三郎より聞書覚

八月二日朝田ノ浦湊沖合へ異船四艘懸候事

但此所長州府中領壇ノ浦前田と申所之墓場に向ひ陸より

船迄式拾丁程隔

一 同日八ツ時頃迄段々大小之船々々拾四艘右沖へ掛る

大船 八九十間より百間余 船の片表へ大砲式十四挺懸掛
置船之外へ皮の幕を張置候事大砲之玉も利不申と云

小船 三十五間より四十間先
迄大砲片表六十丁宛同前

一同四日朝長州より役人兩人か小船二而異國船へ乗込、何ぞ應
接被致候右役人を留置無程兩墓場を目當ニ炮發致

候より双方打合と成、夜に入て止む

右者大船壹艘沖中へ横たハリ片表の大砲順々に打發し

終り候へハ小船式艘六挺懸大砲を打立候内大船相廻り前之

如く終ハ小船又々右之通打廻し片時も絶間なく

言らに百千之雷のこくく聞得る、墓場々々より打出候玉ハ
多分船へ届兼候様ニ相見得候事、右之内壱發大船之
中へ落候而七八人も死亡と相聞得候外、大船壱艘陸近く
颯来候を打候時、檣へ中り船傾き候を翌日小船式艘
にて中荷を取揚げ別之大船式艘ニ而右船を釣あけ

但此日之船中より式千發も有之候得共、長州方墓場
之上山之半覆に松杉など林有之所へ夥しく幕張
置、人ハ壱人も居不申、遥其下より大炮打出候よし
船中よりハ思ふに幕張を目當發候所、多分はのり玉ニ而
死人怪我人多く無之趣申候

此謀計長州方圖に當るといふへし

同日早朝より又々墓場方砲發致候、此時船々陸より三十
挺程沖へ颯下り昨日之通り大小船三艘ニ而打掛候事
同日昼頃に至り長州方甚手弱く船より五發之間、漸々
壱發位打出候事、同夜五ツ時異人共上陸、同七ツ時頃

【八七頁】

實に百千之雷のこくく聞得る、墓場々々より打出候玉ハ
多分船へ届兼候様ニ相見得候事、右之内壱發大船之
中へ落候而七八人も死亡と相聞得候外、大船壱艘陸近く
颯来候を打候時、檣へ中り船傾き候を翌日小船式艘
にて中荷を取揚げ別之大船式艘ニ而右船を釣あけ
引取候事

但、此日船中より式千發も有之候得共、長州方墓場
之上山之半覆に松杉など林有之所へ夥しく幕張
置、人ハ壱人も居不申、遥其下より大炮打出候よし
船中よりハ思ふに幕張を目當發候所、多分はのり玉ニ而
死人怪我人多く無之趣申候

此謀計長州方圖に當るといふへし

同日早朝より又々墓場方砲發致候、此時船々陸より三十
挺程沖へ颯下り昨日之通り大小船三艘ニ而打掛候事
同日昼頃に至り長州方甚手弱く船より五發之間、漸々
壱發位打出候事、同夜五ツ時異人共上陸、同七ツ時頃

さて小筒二而諍合候由 長洲方死人十九位、國人死人五十八と申事

是ハ傳三郎見聞不仕、下關二而聞候事也、始終之様子

一同六日朝、又々船中より間々に諸方へ打掛候得共、長州方敗北か

一發も打不申、晩方二いたり長州方二而白き旗を建候所、異船

にても橋上へ白き旗を建候、此後一發も無之事、夫方異人

大勢上陸いたし、兩所之墓場へ備置候大炮十六挺奪取、引取

時地雷火にて異人二百人余死亡之由、四日方此時迄異人惣々

死人・怪我人三百人余と申事

一同七日、長州より役人拾人位船中へ罷越、船中方七人直々上陸、應

接被致候事

右應接之趣意風説長洲方陸戦一致申入候所、異人之挨拶

我等事江戸方十二大名より頼二付墓場を打崩候まで

にて、強而陸戦可致義無之と申断候由、其後下關近邊

市中徘徊致、諸色を買立、日本言語にて自在を

【八八頁】

さて小筒二而諍合候由 長洲方死人十九位、國人死人五十八と申事

是ハ傳三郎見聞不仕、下關二而聞候事也、始終之様子

不祥

一同六日朝、又々船中より間々に諸方へ打掛候得共、長州方敗北か

一發も打不申、晩方二いたり長州方二而白き旗を建候所、異船

にても橋上へ白き旗を建候、此後一發も無之事、夫方異人

大勢上陸いたし、兩所之墓場へ備置候大炮十六挺奪取、引取

時地雷火にて異人二百人余死亡之由、四日方此時迄異人惣々

死人・怪我人三百人余と申事

一同七日、長州より役人拾人位船中へ罷越、船中方七人直々上陸、應

接被致候事

右應接之趣意風説長洲方陸戦一致申入候所、異人之挨拶

我等事江戸方十二大名より頼二付墓場を打崩候まで

にて、強而陸戦可致義無之と申断候由、其後下關近邊

市中徘徊致、諸色を買立、日本言語にて自在を

佛しり候とて候、五とて人候なり
 一 大船之内式艘、同日長崎の方へ颯走候事
 一 同日長州外基通又別信口とて候とて候、夫方何方へ
 飛候哉不見得事
 一 同日九艘瀬戸中を登り候事、何方へ廻り
 候哉不知事
 一 長州領弟子嶋と申小嶋へも基場を築候得共是にて
 打出不申事
 一 加賀候・因州候・雲州候・浜田候
 右と津和野口より陸通長州領へ討入候様子と評判之事
 但此所老万式千石之家老之固難高山にて極めて嶮岨之
 よし、大炮五六丁掛置候事
 一 外陸通攻、日少く之攻口八廣嶋塚、鯨川と申所吉川監物持場にて奇
 兵隊と申一備嚴重二固居候由

【八九頁】

働候ハ傳三郎直々見聞致候事
 一 大船之内式艘、同日長崎の方へ颯走候事
 一 同日長州領裏通石州濱田邊まで颯廻り、夫方何方へ
 飛候哉不見得事
 一 同日九艘瀬戸中を登り候事、何方へ廻り
 候哉不知事
 一 長州領弟子嶋と申小嶋へも基場を築候得共是にて
 打出不申事
 一 加賀候侯・因州候侯・雲州候・浜田候
 右者津和野口より陸通長州領へ討入候様子と評判之事
 但此所老万式千石之家老之固難高山にて極めて嶮岨之
 よし、大炮五六丁掛置候事
 一 外陸通攻、日少く之攻口八廣嶋塚、鯨川と申所吉川監物持場にて奇
 兵隊と申一備嚴重二固居候由

上大樹公殿下書

臣重義以菲々之才、薄々之量、叩議天下之政、其罪至極、雖然臣會生於弓馬之家、俗於德川氏二百余年之恩澤、而遭 皇国三千年未曾有之大難、何其不幸哉、臣以知天生吾徒之不尋常也、臣夙憂 王室之衰微、而嗟武門之失任、慷慨切齒于此數年矣、天下之英風日萎靡、醜夷之跋扈日積甚、神州之正氣將墜也、臣一念發於此、涕泗交流、繼之以血、臣謂為天子如此之憂者、醜夷也、為天下如此之亂者、醜夷也、直欲攘夷以伸臣子大馬之誠、一安天朝之宸襟、二立霸府名義、三明尊攘之 大義也、而志願未成、不幸而為縲紲之囚、朝暮待死之外無他事、雖然回視 天子未安宸襟之秋、霸府未清國辱之時、則毛髮竦然、義氣鬱勃、有為天下國家所欲一言之者也、囚中忌憚之數日矣、慨然自振曰、英雄議天下大義、何論囚與不、乃言所欲言之事、以上之於殿、獻芹之忠、和煦之暴、未至害霸府、庶議也、昔年客氣、恐有羸暴過激之言、殿下深察之、臣不任大幸、伏惟嘉永癸丑之年、自墨夷之來航於茲十有余年也矣、物價騰揚、富者益富、貧者益貧、百姓苦塗炭、轉溝壑、至其甚、則為流賊、又敵、

【九〇頁】

(四十五) 上大樹公殿下書 《塙又三郎上書》

上大樹公殿下書

臣重義、以菲々之才、薄々之量、叩議天下之政、其罪至極、雖然臣會生於弓馬之家、俗於德川氏二百余年之恩澤、而遭 皇国三千年未曾有之大難、何其不幸哉、臣以知天生吾徒之不尋常也、臣夙憂 王室之衰微、而嗟武門之失任、慷慨切齒于此數年矣、天下之英風日萎靡、醜夷之跋扈日積甚、神州之正氣將墜也、臣一念發於此、涕泗交流、繼之以血、臣謂為天子如此之憂者、醜夷也、為天下如此之亂者、醜夷也、直欲攘夷以伸臣子大馬之誠、一安天朝之宸襟、二立霸府名義、三明尊攘之 大義也、而志願未成、不幸而為縲紲之囚、朝暮待死之外無他事、雖然回視 天子未安宸襟之秋、霸府未清國辱之時、則毛髮竦然、義氣鬱勃、有為天下國家所欲一言之者也、囚中忌憚之數日矣、慨然自振曰、英雄議天下大義、何論囚與不、乃言所欲言之事、以上之於殿下深察之、臣不任大幸、廟議也、昔年客氣、恐有羸暴過激之言、殿下深察之、臣不任大幸、伏惟嘉永癸丑之年、自墨夷之來航於茲十有余年也矣、物價騰揚、富者益富、貧者益貧、百姓苦塗炭、轉溝壑、至其甚、則為流賊其弊

本於和親，是醜夷之不可以不攘一也。今乃武德氏之輔翼，王室不親昵，

足之醜夷，污穢神州，刑之武威，因循維持，終日于赫，皇朝三千年

之土地，人民以至與之於醜夷，若如此則，德川氏之名義，後世何如哉。是

醜夷之不可以不攘二也。臣之事君也，有義有道，是天地之大綱。

天子聖明，有掃攘再三之勅，而霸府姑息之吏，輕侮不奉，豈可謂臣事君

之道哉。是醜夷之不可以不攘三也。天之警戒，可恐，可惶，乙卯地震，丙辰大風，

至于近歲，妖星數見，天心怒，地氣變，妖證既如此也。是醜夷之不可以不攘

四也。長藩之構兵也，奉天朝之聖意，憤霸府之怠惰也。縱令長藩真

無奉聖意之心，不攘眼然之醜夷，而何以責長藩之構兵也哉。是醜夷之

不可以不攘五也。昨癸亥之年，大和之舉，今歲筑波山舉，皇國之大難，

天子不安，震襟之秋，不堪坐視，慷慨激之餘，發於一隅者也。其志皆

欲攘夷也。其與也，本親是醜夷之不可以不攘六也。右天戒人變，皆霸府輕

侮于天朝，尽力於枝葉，而不憂根本故也。願殿下少察臣之言，而採摭之，

臣竊惟，殿下有英明之資，以為之志，而勞心回覆數年矣。而群臣偷

位玩常，恬然不顧所為，是何哉。惟殿下誠心之未至歟。將大臣之誤國歟。以臣

察之，回復之業為難也矣。夫東照神祖明察果斷，如其臣本多忠勝、井伊

【九一頁】

本於和親，是醜夷之不可以不攘一也，今乃武德氏之輔翼，王室不親昵，

足之醜夷，污穢神州之武威，因循維持，終日于赫々々，皇朝三千年

之土地・人民，以至與之於醜夷，若如此則，德川氏之名義，後世何如哉，是

醜夷之不可以不攘二也，臣之事君也，有義，有道，是天地之大綱，

天子聖明，有掃攘再三之勅，而霸府姑息之吏，輕侮不奉，豈可謂臣事君

之道哉，是醜夷之不可以不攘三也，天之警戒，可恐，可惶，乙卯地震，丙辰大風，

至于近歲，妖星數見，天心，怒，地氣變，妖證既如此也，是醜夷之不可以不攘

四也，長藩之構兵也，奉天朝之聖意，憤霸府之怠惰也，縱令長藩真

無奉聖意之心，不攘眼然之醜夷，而何以責長藩之構兵也哉，是醜夷之

不可以不攘五也，昨癸亥之年，大和之舉，今歲筑波山舉，皇國之大難，

天子不安，震襟之秋，不堪坐視，慷慨激之餘，發於一隅者也，其志皆

欲攘夷也，其與也，本親是醜夷之不可以不攘六也，右天戒人變，皆霸府輕

侮于天朝，尽力於枝葉，而不憂根本故也，願殿下少察臣之言，而採摭之，

臣竊惟，殿下有英明之資，以為之志，而勞心回覆數年矣，而群臣偷

位玩常，恬然不顧所為，是何哉，惟殿下誠心之未至歟，將大臣之誤國歟，以臣

察之，回復之業為難也矣，夫東照神祖明察果斷，如其臣本多忠勝・井伊

嗚呼安定天下如此其難也然而殿下明察未及神祖其謀臣不如忠勝直政等而內有不服諸侯外有醜夷之大患殿下何以回復之是臣以為難一也殿之與也亦有伊尹周之與也亦有太公矣我朝源右府將之與也有大江廣元足利氏之與也亦有細川賴之皆有希世之才畧而扶之而後為大業故自古有為之君必有希世之大臣以任大責必有直亮之近臣以進忠諫今殿下果殿下有大臣之任大責近臣之進忠諫苟與又人欲回復天下是臣以為難二也臣聞治國有大計滅夷有大略大計定而廟堂之議論不變大略立而邊陲之小岨不撓而大計大略應機而施之遂能安定天下也今殿下有大計而定于內歟布大略而立於外歟苟無其人欲回復天下是臣以為難三也昔北条氏之衰也尚有磨而萬之軍而西上之回復天下是臣以為難三也昔北条氏之衰也尚有磨而萬之軍而西上之勢也新田氏興於上野遂能斃之焉今有大藩自於其背而翻乎尊攘之旗旗憤霸府之怠惰提十萬之兵直襲江戶則霸府何以防之哉廟議嘗不憂之而尽力於枝葉之筑波山之舉是何心哉可為痛哭流涕歎息矣殿下若惡臣之說則速裁其罪而收其希世之士則大計定矣則回復之業可踏足而復也然而當時議者曰不備具兵器儲峙糧食則與彼難抗嗚呼可謂不知事者也天下之兵器糧食藏於民間者多矣霸府出令募之民間遠國既數年矣而兵器未備具糧食未儲峙

【九二頁】

直政等忠勇確乎不暇枚舉、雖然櫛風浴雨、林 尽數十年之辛勞而後安定天下、嗚呼安定天下如此其難也、然而殿下明察未及神祖、其謀臣不如忠勝・直政等、而內有不服諸侯、外有醜夷之大患、殿下何以回復之、是臣以為難一也、殿之與也、有伊尹・周之與也、有太公矣、我朝源右府將之與也、有大江廣元・足利氏之與也、有細川賴之、皆有希世之才畧、而扶之而後為大業、故自古有為之君、必有希世之大臣、以任大責、必有直亮之近臣以進忠諫、今殿下果殿下有大臣之任大責、近臣之進忠諫、苟無其人、欲回復天下、是臣以為難二也、臣聞治國有大計、滅夷有大略、大計定而廟堂之議論不變、大略立而邊陲之小岨、不撓而大計大略應機而施之、遂能安定天下也、今殿下有大計而定於內歟、布大略而立於外歟、苟無其人、欲回復天下、是臣以為難三也、昔北条氏之衰也、尚有磨而萬之軍而西上之勢也、新田氏興於上野、遂能斃之、焉今有大藩興於其背而、翻乎尊攘之旗、憤霸府之怠惰、提十萬之兵、直襲江戶則、霸府無何以防之哉、廟議嘗不憂之、而尽力於枝葉之筑波山之舉、是何心哉、可為痛哭流涕歎息矣、殿下若惡臣之說、則速裁其罪、而收其希世之士則、大計定々々、則回復之業可踏足而復也、然而當時議者、曰不備具兵器、儲峙糧食則與彼難抗、嗚呼可謂不知事者也、天下之兵器糧食藏於民間者多矣、霸府出令募之、民間遠國既數年矣、而兵器未備具、糧食未儲峙、

何哉。不尽力於其本而盡於其末也。唯殿下誠反其道而正其本，退其臣
而來希世之士，定大計而決然下攘夷之令，直行其實，則天下之兵器不令
而備具，天下之糧食不令而儲峙，天下之英傑不令而歸來，其如此則何
志不遂，何事不成。古語曰：上有好者，下有甚焉者。霸府不好攘夷，而英
傑之者多，今霸府誠正其本，而定大計，決然下攘夷之令，直行其實，則天下
潛伏英傑之士，雲蒸霧集，聲從響應，各以其所長効之宇內之大藩諸侯，
皆悅而盡其力，而況於普代恩顧之臣乎。其如斯，則數千萬之兵可期日
而群集於江戶，而後撰將任能，出奇謀，出機先戒陣整，諸將上洛奏捷，
安天朝，積年之震襟，振其天勢，以捶御列藩，則列藩可以悅之。霸府決然降
使仙臺・南部・津輕・岩手・而撰
之長崎・薩摩・備前・備後・備中・備前然則，皇國一致可以攘夷，可以輝威，而德川氏中興之
業可成也矣。殿下何憚而不為之。皇國一致而後沿海防禦之策，可施，沿海
防禦之策，古人論之者多矣，廟議採其宜者而可也。然臣竊惟沿海防禦之
術，則列藩各守封建，則以足不疲弊於奔走運糧乎，而一旦有急不能支，
則使吏不添於海濱諸侯赴援，其法一萬石以步卒五十人，為度將卒砲
礮適，其二萬石百人，十萬石五百人，以其通制之足備於緩急乎，京都
一橋公率諸國勤王之士，數萬以警衛之，浪華使備前・姫路・彦根・郡山

【九三頁】

何哉、不尽力於其本而盡於其末也。唯殿下誠反其道而正其本，退其臣
而來希世之士，定大計，而決然下攘夷之令，直行其實，則天下之兵器不令、
而備具，天下之糧食不令、而儲峙，天下之英傑不令、而歸來，其如此，則何
志不遂，何事不成。古語曰：上有好者，下有甚焉者。霸府不好攘夷，而英
傑之者多，今霸府誠正其本，而定大計，決然下攘夷之令，直行其實，則天下
潛伏英傑之士，雲蒸霧集，聲從響應，各以其所長効之宇內之大藩諸侯
皆悅，而盡其力，而況於普代恩顧之臣乎。其如斯，則數千萬之兵可期日
而群集於江戶，而後撰將任能，出奇謀，出機先戒陣整，諸將上洛奏捷，
安天朝，積年之震襟，振其天勢，以捶御列藩，則列藩可以悅之。霸府決然降
使仙臺・南部・津輕・岩手・而撰
之長崎・薩摩・備前・備後・備中・備前然則，皇國一致可以攘夷，可以輝威，而德川氏中興之
業可成也矣。殿下何憚而不為之。皇國一致而後沿海防禦之策，可施，沿海
防禦之策，古人論之者多矣，廟議採其宜者而可也。然臣竊惟沿海防禦之
術，則列藩各守封建，則以足不疲弊於奔走運糧乎，而一旦有急不能支，
則使其不添於海濱諸侯赴援，其法一萬石以步卒五十人，為度將卒砲
礮適，其二萬石百人，十萬石五百人，以其通制之足備於緩急乎，京都
一橋公率諸國勤王之士，數萬以警衛之，浪華使備前・姫路・彦根・郡山

守之任辭 神廟藤堂守之、江戸城德川氏自守之、箱館使仙臺
部・佐竹・津輕赴援、佐渡・會津・上杉・榊原・酒井守之、隱岐使因幡・美
作・出雲守之、對馬・壹岐使長門・安藝・久留米赴援、防禦概略以備焉
至、海外小嶋、乃使其人民移中國、然則百萬之艘、雖蔽海而來、因利
防之、應機而破之、我何畏彼哉、而霸府專務節儉、禁浮費、而蔽武備、
儉飲食、儲倉廩行之數年、天下之風俗日淳厚、天下之英傑日効力、天
下之兵器日備具、天下之倉廩日滿盈、而後醜夷遁避四海靜謐、殿下
又為中興之英主矣、然則上安 天朝之震襟、下救萬民之塗炭、后世千
歲之下歌頌殿下之高德、而長受其賜焉、楠公兵法曰、天下之事、有先之
先、有二之二、臣不肖雖不知兵法、是皆謂機會也、先之先投機先也、二之二
投機後也、臣謹察之先之先、在嘉永癸丑年墨夷來航之時也、而廟堂
苟安先、其機會也、二之二臣愚察之在於此間矣、願殿下深察之、宗忠間
日、時哉、不可失機會、間不容髮、今殿下偷一日之安、而不為之、則後來之
機會是何時哉、若不然則德川氏、祠斷絕於此、天子之尊、蒙塵此
矣、是臣之涕泣悲歎、所以鳴號 於殿下也、伏願哀憐採擇之、諸葛
孔明曰、臣鞠躬盡力、死而後休、臣自幼而慕之、且暮誦之、故号其所
居曰斃休堂、今臣逢 皇國之大難、

【九四頁】

守之、伊勢 神廟藤堂守之、江戸城德川氏自守之、箱館使仙臺・南
部・佐竹・津輕赴援、佐渡・會津・上杉・榊原・酒井守之、隱岐使因幡・美
作・出雲守之、對馬・壹岐使長門・安藝・久留米赴援、防禦概略以備焉
至、海外小嶋、乃使其人民移中國、然則百萬之艘、雖蔽海而來、因利
防之、應機而破之、我何畏彼哉、而霸府專務節儉、禁浮費、而蔽武備、
儉飲食、儲倉廩行之數年、天下之風俗日淳厚、天下之英傑日効力、天
下之兵器日備具、天下之倉廩日滿盈、而後醜夷遁避四海靜謐、殿下
又為中興之英主矣、然則上安 天朝之震襟、下救萬民之塗炭、后世千
歲之下歌頌殿下之高德、而長受其賜焉、楠公兵法曰、天下之事、有先之
先、有二之二、臣不肖雖不知兵法、是皆謂機會也、先之先投機先也、二之二
投機後也、臣謹察之先之先、在嘉永癸丑年墨夷來航之時也、而廟堂
苟安先、其機會也、二之二臣愚察之在於此間矣、願殿下深察之、宗忠間
日、時哉、不可失機會、間不容髮、今殿下偷一日之安、而不為之、則後來之
機會是何時哉、若不然則德川氏、祠斷絕、於此 天子之尊、蒙塵此
矣、是臣之涕泣悲歎、所以鳴號 於殿下也、伏願哀憐採擇之、諸葛
孔明曰、臣鞠躬盡力斃而後休、臣自幼而慕之、且暮誦之、故号其所
居曰斃休堂、今臣逢 皇國之大難、

天子不安震襟之秋、鞠窮盡力、而縲紲之因斃而休、不顧臺閣之
崇汗瀆威嚴、誠惶恐罪當萬死

元治元年甲子九月

塙又三郎重義生年十九泣血

百拜謹上書

【九五頁】

天子不安震襟之秋、鞠窮盡力、而縲紲之因斃而休、不顧臺閣之
崇汗瀆威嚴、誠惶恐罪當萬死

元治元年甲子九月 塙又三郎重義生年十九泣血

百拜 謹上書